

大塩の乱

〈解説文〉

当二月十九日、不容易
企およひ、大坂市中
所々放火致、及乱妨候、
元大坂町奉行組与
力大塩平八郎并組
与力大塩格之助、同瀬
田濟之助、同組同心
渡邊良左衛門、同庄司
義左衛門、同近藤鍋五郎、
忤近藤梶五郎等、人
相書

大塩平八郎

一年齡四拾五六歳
一顔細長^ク、色白^キ方
一眉毛細、薄^キ方
一額開^キ、月代青^キ方
一眼細^ク、つり候方
一鼻常躰
一耳常躰

一せい常躰、中肉
一言舌さハやか^{二面}、尖^キ方

其節着用

一鍬形付甲着用

一黒陣羽折

一其余着用不分

〈読み下し文〉

当二月十九日、容易ならざる企^{くわだ}てに及び、大坂市中とどころ
放火致し、乱妨^{らんぼう}に及び候、元大坂町奉行組与力大塩平八郎並びに
組与力大塩格之助、同瀬田濟之助、同組同心渡邊良左衛門、同庄
司義左衛門、同近藤鍋五郎、忤^{なべ}近藤梶五郎^{せがれ}ら、人相書^{にんそうがき}

大塩平八郎

一年齡四十五・六歳
一顔細長^ク、色白^キ方^{ほう}
一眉毛細^{まゆげ}く、薄^{うす}き方
一額開^{ひたい}き、月代青^{さかやき}き方
一眼細^{ひとめ}く、つり候方
一鼻常躰^{はなじょうたい}
一耳常躰

一 背常体、中肉 ちゆうにく

一言舌さわやかにて、尖き方 せんぜつ

その節着用

一 鍬形付き甲着用 くわがた かぶと

一 黒き陣羽織 じんばおり

一 そのほか着用わからず

〈用語の解説〉

・ 二月十九日：天保8（1837）年2月19日。

・ 乱妨：略奪、暴行、破壊などの不法行為。

・ 与力：町奉行の支配下で司法・警察など治安維持にあたり、同心を指揮して職務を遂行した。

・ 月代：成人男子が前髪から頭頂部まで髪をそること。

・ 常体：ふつう。

・ 言舌：ものの言い方。

・ 陣羽織：戦場で具足の上に着用した上衣。

〈解説〉

大塩平八郎（1793～1837）の人相書である。年齢・身体の特徴・当時身に着けていた服装などを記している。

大塩は、大坂町奉行所の与力であった。その人柄や仕事ぶりか

ら信望を集めていたが、38歳で与力の職を息子格之助に譲り、私塾「洗心洞」で与力・同心・豪農の子弟に陽明学を教えていた。

天保7（1836）年の凶作による飢饉は全国に及び、大坂も例外ではなかった。ところが、奉行所は幕府からの江戸廻米令に従って米不足に悩む江戸へ米を送り、豪商のなかには米を買い占めて大儲けをたくらむ者もいた。大塩は大坂東町奉行の跡部良弼に救済策を進言したものの聞き入れられず、ついに挙兵を決意した。

大塩は自らの蔵書すべてを売り払い、貧民の救済に充てた。さらに「檄文」を近隣の村々に配り、決起への理解と参加を呼び掛けている。大砲や武器・弾薬も手に入れて決起の準備を進めた。2月19日の早朝、洗心洞に集う門弟二十数名とともに、総勢約300人が「救民」の旗を掲げて進撃し、大坂天満（大阪市北区）一帯を焼き払った。大坂町奉行所の鎮圧により半日で鎮圧されたが、火災は翌日まで鎮火せず、市中の5分の1が焼失した。しかし、この大火で被害を受けたはずの庶民は、むしろ大塩らの行動に同情的だったという。

大塩が行方をくらましたため、幕府は逃亡した大塩ら首謀者の人相書を諸国に配布し、きびしい捜索を行った。挙兵から40日後、

ようやく大塩父子を発見したが、父子は火を放って自害した。

大坂という重要な直轄地で、町奉行所の元与力が主導して公然と挙兵したことは幕府や諸藩にも大きな衝撃を与えた。この乱に刺激されて越後柏崎^{かしわざき}では生田万^{いくたよろず}の乱がおこるなどし、天保の改革が開始される原因ともなった。

【参考文献】

・家永三郎編『日本の歴史3』ほるぷ出版

・歴史教育者協議会編『一〇〇問一〇〇答・日本の歴史4 近世』

河出書房新社